２００５~２００６年度　創立３０周年

超我の奉仕

越谷北ロータリークラブ

例会日：毎週水曜日　１２：３０～１３：３０
例会場：越谷市千間台東１－１－６　クオレ千間台　２Ｆ
TEL　０４８（９７５）９８９８
FAX　０４８（９７７）３７４１
創立：１９７６年5月１１日

会　　長：　安井　晃
副　会　長：　豊田　昇
幹　　事：　増田　英樹
会報委員長：　長谷川　真也

第　1480 回例会記録　　No.　３８
平成 18 年 6 月 14 日
司会：　本間　　孝
編集：　宮崎　敏博

会 次 第

１．点鐘
２．ロータリーソング　「それでこそロータリー」
３．お客様紹介
　　青木　伸翁　様
　　小宮山大介　様
４．会長挨拶
５．幹事報告
６．委員会報告
７．外部卓話　「職業奉仕の原理」
８．スマイル報告
９．出席報告

次回例会予告
平成 18 年 6 月 28 日
安井年度最終例会
東京ディズニーシー・ホテルミラコスタ
午後６：００より

会長挨拶

(安井　晃　会長)

歯科の再生医療

病気やケガで失われた組織や臓器を移植や人工物への置換によって再建し、再機能させる治療法は昔から研究され実用化されているものもあります。しかし、免疫不全を起こしたり、患者さんの精神的、肉体的負担増や、治療期間、費用、薬事法、医療法等、いろいろクリアーしなければならない問題があります。

歯科領域における再建手術には、ガンやのう胞形成病変、外傷等で口唇、舌、頬、の一部を失った時は、周囲組織や大胸筋を誘導しての治療方法があります。下顎骨の一部を失った場合は、腸骨の移植や、チタン性金属プレートを埋め込む方法、仮骨延長手術を行って

再建する手術が医科大学病院･歯科大学病院の口腔外科で行われております。

ところで、トカゲのシッポのように切っても再び生えてくるように、人間の組織や臓器の一部が失われても再生できれば、多くの患者さんは健康な生活を取り戻すことができこんなすばらしいことはありません。

近年、組織や臓器の再生を目指しての研究が行われております。それは、大人の体の中にある、未分化幹細胞を用いて、さまざまな組織を再生しようとするものです。この幹細胞には、体のほぼ全ての細胞に分化する能力を持った多能性のＥＳ細胞と、分化の方向がある程度限定され、特定の組織や臓器の形成に維持に関与する体性幹細胞があります。骨髄中に含まれる間葉系幹細胞を用いて、骨や、軟骨、骨格筋、脂肪、心筋、神経細胞に分化させたという研究報告があります、

歯科領域では、歯の再生を目指して基礎的研究、動物実験による研究が進められていまして、形態のコントロールはできませんが、歯の構造の一部を除いて再生できたとの報告があります。又、歯を支えている歯槽骨の再生の研究では、動物実験を経て成果が確認されてから実際の臨床に応用されました。それは、約2 年前、名古屋大学医学部付属病院･歯科口腔外科で 72 才の男性に上顎右側臼歯部にインプラント植立と、腸骨から採取した骨髄由来の間葉系幹細胞と末梢血から採取された血小板濃厚液の混合物（これを注入型培養骨といいます）の注入を同時に行いました。6 ヶ月後には歯槽骨が完全に再生しインプラントの動揺も見られなかったとの症例報告があります。

これは患者さんにインフォームドコンセントを行い、大学の倫理委員会の許可の基に行われ症例でありまして、未だ一般的に広く応用されるまだは時が必要であると思います。このように歯科領域においても治療法の一つとして再生医療の研究が着実に進められ、実用化されていくものと思います。

幹事報告

(増田　英樹幹事)

1. 越谷中ＲＣより例会日変更のおしらせ。
2. ジョンレノン･ミュージアム館長、水沢順一氏より「ジョン･レノンにみえていた世界～イマジン」ちらし、ポスター配布のお願い。
3. 越谷市市議会より、前越谷市議会議長･石川下公氏、前副議長･藤井登美雄氏の退任と、越谷市議会議長･永井龍男氏、副議長･野口桂司氏の就任の挨拶が届いております。
4. 越谷市商工会、前会長･大野邦彦氏の越谷市商工会会長･帷子和夫氏、副会長･渡辺孝一氏、副会長･浅子洋氏、専務理事･河原常美氏、就任の挨拶が届いております。
5. 国際ロータリー第 2770 地区 2005～2006 年度ガバナー、森田武司氏、地区幹事小野寺芳彦氏より、ガバナー事務所閉鎖のお知らせが届いておりますが、7 月 20 日までは直前ガバナー事務所として残務処理を致しております。

委員会報告

社会奉仕委員会

木村　二夫委員長

ジャワ島の地震に支援金 5 万円を送りました。

30周年記念誌委員会

長谷川 30 周年記念誌委員会

30 周年記念誌用の個人ファイルがまだ出てない方早めに提出お願い致します。

入会希望者

小宮山大介様
推薦者　木村二夫会員

外部卓話

職業奉仕の原理

越谷東RC　青木伸翁　様

鮎の友釣りは強い鮎がテリトリーを持って餌場を独占し、他の鮎がそのテリトリーを侵すと、猛然と攻撃をするという、鮎の習性を利用した釣りのことであることは、皆様良くご承知のことであります。

ところで、自分の餌場を独占して、自分だけ育っていこうとする鮎たちの生態を思うとき、自由競争原理の支配する私たちの職業社会は、果たして如何なものであろうかと思うのであります。自分だけが独占をしようとして失敗した例は、時として耳にするところであります。

親会社から自分の生産能力を超える発注を受けた下請け業者が、自分だけでその注文に応じようと、銀行融資による過大な設備投資をした後、親会社からの発注を止められる。親会社に泣きつくと、それでは資金援助をしようといって、結局は企業買収になるということがあります。時々ある話ではありますが、大資本が悪いわけではありません。下請け業者が同業他社との共存共栄を考えず、自分だけが儲けを独占すべく、過大な設備投資をしたことに問題があったからであります。

これに対し、有名な銘菓店で夕方早い時間に商品が売り切れる。作ればいくらでも売れるのでありますが、自分の製造能力、管理能力の８０％の商品しか作らない店があります。何故ならば、それ以上作って、もし一つでも粗悪品が出来ると、顧客に迷惑をかけ、引いては自分の信用が傷つくからであります。良質な商人は、顧客に対して、絶対的な責任を負いますから、決して商品の質を落としません。これが、職業倫理であります。

我々、資本主義社会では自由競争が基本原則になっております。これは同業者との関係においては、まさに食うか食われるかの関係にあることを意味いたします。したがって、他人のことを考えていると自分が食われてしまう、「倫理」など考える余地は無い、という考え方も成り

立つだろうと思います。

しかし、ロータリーは、この自由競争を前提とした職業奉仕を提唱しているのであります。それは、自由競争を前提とする経済社会において、倫理の裏打ちのある企業活動は永続的に安定した利潤を獲得し、必ず勝ち抜いていくであろうということを、原理論的にも、実践論的にも実証していくものであります。

殊に、同業者関係や下請け関係において、ロータリーは常に倫理を求め、共存共栄の道を模索すべきことを説いているのであります。

したがって、少なくともロータリーの世界では、鮎たちの社会の如き事態は起こりえないと思うのであります。

過去を顧みて、人が金を求めて失敗した例は枚挙に遑がありません。しかし、心を求めて失敗したことは、未だ、その例を聞かないのであります。

ところで、ロータリーの職業奉仕は難しいとか、解りにくいという話をよく耳に致します。今日は、その原因が何処にあるのかということを皆様と考えると共に、職業奉仕を理解する一助として、職業奉仕の基本原理についてお話ししてみたいと思います。

職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語であります。一般の人たちはこのような言葉は使っていないのであります。しかし、ロータリアン以外でも職業奉仕をしている人はたくさんおります。

考えてみると、この職業奉仕という言葉は、大変奇妙な言葉であります。何故かと申しますと、職業というものは、私たちの生活手段であり、いわばお金を儲けるための手段であります。したがって、職業は、自分のためのものであります。ところが、奉仕というのは、世のため他人のためのもの、自分以外の人のために何かをすることであります。自分のためのものである「職業」という言葉と、人のためである「奉仕」という言葉、エネルギーの方向が全く正反対の二つの言葉が結びついて、「職業奉仕」という言葉が出来上がっているのであります。

したがって、自分のためのものである職業が、どうして人のためになるのか、この一点が解らないと、職業奉仕は理解できないので、ここのところが、職業奉仕が解りにくいという原因の一つではないかと思うのであります。

ここで、職業というものをもう少しリアルに考えてみます。

例えば、労働を売って金銭(賃金)を受け取る。物を作って、物を売って金銭を受け取る。製造、卸、小売がこれであります。また、知識を売って金銭を受け取る。更に、サービスを売って金銭を受け取る。このように、全てのことは、「売買」という枠組みの中で考えられるものであり、これらは全て、別の言葉で言うと、所謂、「打算」の世界であります。

即ち、人々が、等価交換の原則の下で、常に何らかの価値を求めて、打算によって行動をする分野であります。

このように考えますと、職業というものは、元来、打算の世界にあるものであり、したがって、奉仕ということを考える余地はないと、考えることは至極自然のことであります。ロータリー以外の世界では、これが通説であります。

ロータリアンの中にも、職業を営むことが同時に奉仕になるということはあり得ないと考える人もおられるのであります。果たして、それでいいのかというところから、職業奉仕というものを考えていかなければと思うのであります。

確かに、職業というものは、全て打算の世界に

あると割り切って考える限り、職業をもって奉仕と考えることは出来ないでありましょう。
しかし、ロータリーは、職業を営む心も、世のため他人のために奉仕する心も、同じ一つの心、言い換えると、世のため他人のために奉仕する心と同じ心をもって、職業を営むべし、ということを説くのであります。
利潤追求、所得獲得のために考えるエネルギーと、世のため人のために考えるエネルギーとはその向かっている方向は異ってはおりますが、その行動を起こす基になる心は、一つの心であると考えるのであります。
　したがって、この考え方では、利潤追求、所得獲得の「過程」が問題となり、そこに必然的に「倫理性」を要求することにならざるを得ないのであります。
　では、どういうところから倫理の問題を考えるべきなのでありましょうか。私たちの生活は、その全てが打算によって成り立っているわけではありません。
例えば、夫婦の関係の様に、私のものはあなたの物、あなたの物は私の物、という考え方が支配する分野があります。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき、「愛情」があります。この、愛情の世界は、金銭という尺度では計りえない程価値のある尊いものであります。
　ところで、打算の世界では、等価交換の成立する限りにおいて、人と人が関係付けられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は、貸し借りなしに清算されて、後には何も残らないのであります。
例えば、一万円の商品と一万円の貨幣が交換されることにより取引は終了し、売主、買主の間は、一切貸し借りなしに清算されて、後には何も残らないのであります。
　ところが、愛情の世界では、例えば、妻が親から貰った金銭を夫のために提供し、それが返してもらえなくなったとしても、それを、裁判所に訴えるということはありません。その限りにおいて、清算されないままに「因縁」が残っています。
　これを、打算の世界から見れば、まさに損をしたことになるのでありますが、それを損とは考えないわけでありまして、即ち、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算はありませんが、限りなき愛情があるのであります。
　この関係を職業の分野に投影してみますと、宗教の世界もこれと同じであります。僧侶は、ただ、只管に仏の道を説きます。それは、お布施を求めるために説くのではありません。人々に対する限りなき愛情をもって、人々の悩みを救うために、只管、仏法を説くのであります。
　その結果として、人々が感謝の心を持って、幾許かのお布施を差し出せば、感謝の心をもってそれを受け取るのであり、それは結果の問題であります。
　したがって、偶々、人々が貧しくて、お布施を差し出すことが出来なければ、
それはやむを得ないことでありまして、それを僧侶のほうから請求すべき筋合いのものではないのであります。したがってまた、この関係は清算されないで、僧侶の生活は、その分だけ社会に対して貸し方になっているのであり、その故にこそ、僧侶は、世の中から尊敬と信頼とをもって報いられるのであります。
これは宗教家に限ったことではなく、歴史的にみて、宗教即ち神学から派生して出来た、哲学･法学･医学等全て然りであります。

ロータリーはこれらの分野の職業を一括してProfession と称し、利潤追求を第一義とするBusiness と区別しているのであります。したがって、元来、宗教家をはじめ、大学教授、医師、弁護士等は、神から与えられた原理によりまして、人々を救済することをもって第一義とする職業であると考えられているのであります。

実は、職業奉仕というものは、この愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールしていこうという考え方であります。Professionの論理をもってBusinessをマネージすると言ってもよいと思います。これが、職業奉仕の基本原理であります。

愛情の世界は、人間関係が清算されないで、常に人と人とがあるものによって因縁づけられている世界であり、色々な出会いがいつまでも尊重されていく世界であります。そういう世界から「尊敬と信頼」が生まれてくるのであります。

実業家にとっては、尊敬と信頼に相当するものとして、「信用」というものが生まれてくるのであります。この信用があればこそ、実業家は、長期的に安定した利潤を獲得していくことが出来るのであって、個々の取引が常に貸し借りなしに清算されていく打算の世界からは、尊敬も、信頼も、そして信用も生まれてこないのであります。

ロータリーの職業奉仕論が、売買について、商品と代金という、目に見えるものの交換と同時に、「満足と感謝」という目に見えないものの交換が無ければならないと説いているのは、まさにこの点を指しているのであります。

世の中の大成した実業家は、必ず愛情の世界の論理をもって企業をマネージしているといっても良いと思うのであります。

要するに、ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、即ち、世のため人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として「信用」という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得する強靭な体質に企業を作り上げることが出来ると説くのであり、その原理の総体を「職業奉仕」と呼んでいるのであります。

では、この基本原理をどのように具体化して実践に移せばよいのでしょうか。これについて、ロータリーは1915年のサンフランシスコの国際大会において、11箇条よりなる「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」をもって宣言したのであります。

昭和3年、満州の大連ロータリークラブの古沢丈作氏が、アメリカにおけるロータリー思想の源流を探求して、この11箇条のロータリー倫理訓の存在を知り、これを熟読玩味して自家薬籠中のものとし、改めて日本語で5箇条に纏め上げたのが「大連クラブのロータリー宣言」であります。

このロータリー宣言は、日本ロータリーの始祖米山梅吉ガバナーが昭和4年の国際ロータリー第70区第一回年次大会において、古沢丈作氏をロータリアンの鑑であると激賞されるところとなり、ロータリー倫理訓と共に、戦前の日本のロータリアンの職業奉仕実践の道標となっていたものであります。

職業奉仕の基本原理の具体化として重要なことは、1922年のロサンゼルスの国際大会において、国際ロータリー定款と標準ロータリークラブ定款とが採択され、その中に、両者に共通の綱領が規定されるに至りましたが、ロータリーかくあるべきものと考えるという綱領の本文に「ロータリーとは、企業の根底に奉仕をおく

べしとする理想を提唱するクラブ活動のことである」旨を宣言したことであります。
これはまさに、職業をもって奉仕と観ずる職業奉仕の基本原理をロータリーの綱領において提唱したものなのであります。

以上お話したことを、もう少し具体的に言いますと、職業を取り巻く取引関係、企業内管理関係等、ロータリアンの全ての職業関係において、「行動に愛をこめる」ということであります。

ここで一つの物語を紹介いたします。日本カトリック学校協会会長、渡辺和子先生のお話であります。

先生は、29歳でカトリックの信仰に入られ、修道女としてボストンに渡られたのでありますが、夏のある日、食堂において、130人の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。そのとき、先輩のシスターが先生に、「シスター、貴女は、今、何を考えていますか」とお尋ねになりました。先生が、「何も考えていません」とお答えになると、その先輩のシスターは厳しい顔になって「貴女は、時間を無駄にしています」といいました。先生が，その意味を理解しかねて怪訝な顔をすると、その先輩は、「お皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で、『お幸せに』と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然と並べるということは、時間を無駄にしています。」と諭されたそうであります。

渡辺先生は、私は、今まで、如何に効率的に仕事をするか、ということを教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは初めて教わりました。時間に愛を込めても、込めなくても、お皿は同じ速さで、同じ姿に並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、それは一つには、お幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、つまらない仕事、雑用だと思っていた仕事が実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にしたときに雑用になるということを教えられました。救われたのは私であります。

つまらないと思って皿を置く、お幸せにと祈って皿を置く、外から見た限りは全く同じに見えます、かかった時間も変わらない、しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということはその人自身が変わったということであります。このように述懐されたということです。

行動に愛を込めるということは、言い換えれば、職業を倫理的に営むべし、倫理的な商売を営むべしということであります。
1915年、「全分野の職業人を対象とする職業倫理訓」を宣言し、ロータリーの個人倫理が確立され、それ以来、ロータリーは倫理運動として、隆々と栄えてまいりました。
しかし、昨今、ロータリーの個人倫理にかげりが見えてまいりました。最近の国際ロータリーは、その理論提唱を見ましても、倫理を提唱するというよりは、むしろ、弱者救済、いわゆる人道主義的な奉仕活動とか、ロータリー財団、そして、ロータリーの拡大、会員増強、こういう点に重点を置いているかに見受けられます。確

かに、このようなことはロータリーとして避けては通れないものでありますから、これらを実践することも大切なことではあると思います。
我々は、先輩ロータリアンが、試行錯誤を重ね、あるときは、ロータリー分裂の危機さえあったというような議論を戦わし、確立した「職業奉仕の思想」を、もっともっと大切にしていかなければいけないのではないでしょうか。
ポールハリスが、その著書「This Rotarian Age」の中で「奉仕の理想」について、いろいろな考え方がありますが、私は以下のように考える「奉仕の理想とは、物事の最初に『奉仕』を置くことである」と言っております。
　言い換えると、何かを始めるときに、先ず、世のため人のためを考えてから
行動すると言うことであります。
それを、地域社会で行えば社会奉仕に、国際社会で行えば国際奉仕に、職業社会で行えば職業奉仕になるわけであります。
ロータリーは、例会において、親睦のうちに、会員同士が切磋琢磨し、お互いを磨きあいながら、「奉仕の心を作ります」。そして、その作られた奉仕の心を持って、ロータリーの外で、「奉仕の実践」をする。これがロータリーの基本ではないでしょうか。

スマイル報告

本日お世話になります。　青木伸翁

越谷東ＲＣパスト会長　青木伸翁様

いつもお世話になっております、本日の卓話よろしくお願い致します。　安井晃

青木伸翁様、本日はごくろうさまです。

小宮山大介様本日はようこそ。　増田英樹

青木様本日の卓話よろしく　中村義雄・黒田幸英

すみれコースのグランドシニア選手権で 3 位に入りました。　眞々田照雄

欠席勝ちで申し訳ありません、大仕事も峠を越したのでこれからは出席するように努力しますのでよろしく。　西本好郎

仕事の都合で欠席させて頂きます。本日の卓話で弟がお世話になります。　青木清

前回欠席、今回早退。　上床和秀

先週は結婚記念のお祝い誠に有難うございました 。　松﨑義一

世界平和の為に　石井知章・堀野眞孝

本日早退　高橋正美

出席報告

本間孝出席会場運営委員長

会員数	50 名
出席者数	33 名
欠席者数	11 名
出席免除数	6 名
出席率	75.0 %